

# つなぐ「愛の手」

里親ケースワーカーのまなざし ④

## 里親家庭で育って

「愛の手運動」が20年を過ぎた頃、里親家庭で育ち、成人した人たちに協力を得

した人のうち97%が、里親に育てられたことに「まあまあ」も含め「よかった」とし、里親養育を肯定していることが分かりました。生後10カ月で養親に迎えられたN子さんは、幼い時、養子であることを養父母から聞いていました。年齢とともに、元の家族が当時どのようなであったか、なぜ育てられなかったかも話してもらったようです。今は結婚し、2人の子どもの母親として充実した暮らしを送っています。

数年前、養母が病気で亡くなりました。そんな折、N子さんが協会の事務所を訪ねてきました。幼い頃のかわいさが残るもの、もう立派な大人。協会を通して養子縁組となったことも聞いていたそうです。N子さんは自身の言葉で、養親が彼女にどのように関わってきたのかを教えてくださいました。私は、生みの親が苦しい生活の中でN子さんを守ろうとしていたが、別れなければならなかった当時の状況を伝えました。

帰り際、N子さんが「私は生まれ変わっても、あの父さん、お母さんと暮らしたい」と伝えてくれました。この養子縁組に関わった者として、うれしい言葉でした。時としてこうした言葉の後に「今度はあの家で生みたい」と続くことがあります。しかし彼女は違っていました。「もう一度こ

# 「生まれ変わっても、あの家に」

て「生活と意識調査」を実施しました。当時、こうしたアンケートは皆無。全国から注目を集め、里親制度にいい意味での影響を残したと言えます。

その結果にはいくつかの注目すべきポイントがあり、子どもが捉えた里親像も浮き彫りになりました。そのうちのひとつが、子どもは「里親が自分の世話をやしみにしていた」と捉えており、里親が自分のためにしてくれたことを具体的な事柄として印象に残していることでした。また、回答



イラスト・竹内永理亜

(協会)でお世話になって、あの家で暮らしたい」と私に伝え、子どもたちが待つ家に帰っていききました。

自分に起きたこと、どこかを無かったことにするのはなく、生みの親とのつながり、養子になったこと、養父母と歩んだ日々、これら全てを自分のライフストーリーとして受け入れ、肯定して生きているのだと感じました。

(家庭養護促進協会主任ケースワーカー・米沢普子) ◆次回は21日に掲載します。